

二八二

北越雪譜

二編
終





北越雪譜二編三卷

目録



- 鳥追槽とりおひまろ 順列上下小
- 地獄谷の火ぢごくやまのひ
- 無縫塔むふうた
- 年賀の哥ねがのうた
- 菅神御傳畧すげのかみつたてりやく
- 異獸いぶ
- 弘智法印こうちほふいん
- 白鳥しろとり
- 浮嶋うきしま
- 美人びじん

- 雪霜
- 越後の人物えごのじんぶつ
- 北高和尚きたかうわう
- 逃入村の不思議にげいりむらのもうしぎ
- 田代の七ツ釜たしろのしつかま
- 火浣布かせんぷ
- 土中の舟どちゆうのふね
- 兩頭の蛇りゅうとうのへび
- 石打明神いしうちあきかみ
- 蛾眉山下の標準がびざんか下のひょうじゆん

雪譜二編卷之下

目

文溪堂藏

○ 苗場山なへばやし

○ 三四月の雪

○ 鶴恩小報つるおんせうほう

通計二十三條

右異獸みより以下分けて四の巻とす

北越雪譜二編卷三

越後

江戸

鈴木牧之 編選
京山人百樹 増修

○鳥追櫓

農家中正月の行事鳥追といふ事あり此事諸國よりも
あまらば其あまを其国小よりてさあぐある事ハ諸書散見せり江
戸の鳥追といふ非人の婦女音曲をるを女太夫とて木綿の衣服を
うつくしく着あし顔粧ひ編笠をかぶり三弦小胡弓をるを
あつせ賀唱をわしりうつくしく門小立り錢を乞ふ此事元日よ
りちどめ松の内をうきりともを松をきてもありく所もありとを我
越後小正月の十五日ちどめ鳥追櫓とて去年より取除たき
たる山あまを雪の上小雪を以り高さ八九尺あるハ一丈余小も高さ小

雪譜二編卷之下

文漢堂藏書

應ちし末を廣く雪ゆに櫓うを築立たてて登のるる階たをも雪ゆを
作り頂のを平坦の小まり松竹を四隅の小立たてあまを張はりて内
あま居まるるぎやう小まりをあまきあまら小童等ら小まりを喰くひ
あまら遊あび鳥追あをらうらふその一つ小まりのとりやどうらあつてき
とまるぬのくふらあつてきあまをのりてあつてきあまをぬくる
あつてきあまのとりも何のとりもならやがとやのくらあつてき
のさらあたのとりハあつてもくまめまらどりならやがとやのくら
あつてきハかの掘揚山をあつての上小雪を以り四方の堂を作りたて雪
あつてき物をあつてき櫓をもつりりをあまらつて孫あぶやんぜんんん杯
此雪の棚小あま物を煮焼く濁酒あどの小童大勢雪の堂小あ
とま遊あび同音小鳥追あをらうらふ終日を小まりて遊あびらうらふれ
暖国のあま正月あまをらびあり此鳥追櫓宿内のくらあつてき作り

黨をうてあそぶ

○雪霜

前中も志々しくしつごごく北国中へ越後八第一の雪国ありその
中ゆも魚沼古志頸城の三郡を大雪とせ毎年一丈以上の雪中ふ
冬をるせども寒気ハ江戸ふさま心くるまの江戸ハ寒中せし
人とり五雜組ふつ霜ハ露のむきぶ所へ陰あり雪ハ雲に
あそ所へ陽ありつむる雪中あそども夏の備ふ
蒔ける野菜のるぬも雪の下ふ崩れつその用をるまをまを
そゆきのたがひあそども暖国ふらるまのそゆきと三月ふ
そゆめく梅の花を見五月の尻茄子を初物とせ山中ふつて
山櫻のさつり四月のまを五月ふつる所もあるあり

○地獄谷の火

雪譜二編卷之下

文溪堂藏

此書の前編上の巻雪中の火といふ条ふ六日町の郡魚沼西の山手ふ
地中より火の燃事を知るせし地獄谷の火の度をしつて
あふふるの。おと我越後ふ名高く七不思議ふかぞいふ蒲原郡
如法寺村百姓莊空門七兵衛孫六が家ふある地中より燃火ハ普く
人の知る所あそども其火より盛大あるハ魚沼郡のちちかの小千
谷の在地獄谷の火あり唐土ハ是を火井といふ近來此地獄谷ふ家
を作り地火を以て湯を燂客を待て浴さしむ夏秋のそゆめ
まへハ遊客多し此火井他国中ふきつて越後ふ多し先年蒲
原郡の内或家ふ井を掘ふ其夜医師來りて井を掘し度
を聞家ふ飯時挑灯を井の中へ入るとのありしゆ井を見くと立
さつりふ井中より俄ふ火をいづり火勢さうんハ燃あがりけは近
隣のものども火事ありとてをきつけ井中より火のものを

此井を掘りて火ありとて村のものども口く小主人を罵り恨
けり主人も此火をおそとて埋りて此地火一陰火といふ
如法寺村の陰火も微風の気いづる小焚燭の火をうせば風
氣平小應下
て燃る陽火を得ざる燃を寛文のむら一在右二門が如法
寺村庭あり韃を
はらひする時より燃るもあつとて前ふの井中の火も医者
が挑灯を
井の中へさげしゆゑこの陽火もくもえいづるあつとて
●さて又頸城
郡の海辺不能生宿といふ北陸道の官路あり此宿より山
平小入る
二里むらり小間瀬口といふ村ありこの農家小地火をい
とてを度如法寺村
の地火小同とて此むらり用水小多しき所ゆへ旱のをり
山小就
井を横小堀り水を得る度ありある時井を掘り横小
とりし時穴の闇
きをててとたぬ小炬を用ひつる小陽火を得る陰火
忽ち狀あがり人
是
う為小焼死しけるとて是等の度どもをいひする小越
後のうらみ地

雪譜二編卷之下

文溪堂藏

火をいざと火脈の地多くしきと陽火を得る一とて
發せざるも多し
と

百樹曰余小千谷小あり一時岩居余小地獄谷の火を見せん
とて
社友五人を伴ひ用意の酒食を美奴二人小荷り余京水と
同
行十人小千谷ををるると西の方・新保村・藪川新田といふ村
を歴る一宮といふ村といふ山間の家畦曲節て茲小抵る行程一里半
可あり是日ハこと小快晴とて村落の秋景百逞目を奪ふとて平山
一ツを踰る坡あり別地獄谷といふの徑あり坡の上より目を下せば
一ツの茅屋あり是本文小い混堂あり人々坡の半小いりり時
茅屋の樓上小四五人の美婦あつとておのく檻小よりて遠小この
人々を指もありあるハ笑ひあるハ名をよびあるハ手をうちたさ
あるハ手をあげてまわく四面皆山あり老樹鬱然とて一
段壑塞の

中ふ個美人を見ること愕然一是狸ふあゝもんばうあゝば狛あゝん
とらひけしむ岩居友ざらと相顧乎を拍て笑ふことふ小千谷の下
町とらひ所の酒樓ふ居る酌抹の哥妓どもあり岩居朋友と計り
竊ふ此ふ招もまて余ふ真をせん為とぞ渠ハ狛ふあゝもんばうと岩居
ふ魅さささるあり已ふ地獄谷ふらり皆樓ふのむより岩居ハ余と
京水とを伴ひてかの火を視せしむ・そもく・茲谷ハ山櫻まうり
ゆゑ櫻谷とよびるを地火あるをりて四方五十歩六尺を歩をひきまて
平坦の地とあり地火を借りて浴室とあり人の遊ぶ所とせしむとぞ
櫻谷とよびる処地火のため地獄とよぶこと花ハまぞり・瀧噴
くゞー・さくとの火を視るふ一ツの浅き井を作りたるその井中
より火の燃る事常の湯屋の火よりも盛あり上ふ釜あり一間
四方の湯槽あり細き竈ありと石の山の清水を引き湯槽小

雪譜二編卷之下

とて湯ハ槽の四方ふ溢とあつらをりて此湯温くも熱くも
天工の地火盡る時あひまて人作の湯も盡る期あり見ふも清潔
ある事しむとぞ此混堂ふ續きと厨処あり灶あり穴ありと地
火を引く物を烹薪小同ト次ふ中の間あり床の下より竹箆を出
し口ハ一寸むり銅を鉗て火を出さしむ上より自在をさげ此火
小酒の焔をありあゝの茶を煎夜ハ燈火とをさへ熟此火を視るふ
箆をさるること一寸むりの上ハ燃る扇ふあゝの陽火のむとくふ
消る箆の口ハ手をあててとらむふ少く風をうらむのそ数燭の
火を翳せば忽然ととらむこととらめの如し主の翁が白この火
夜ハ昼よりも燥烈く人の顔青くとらむこととらり翁が妻水のうち
よりあゝの火を見せゆさんとぞ混堂のうらふ僅の山田ある所
からり田の水の中ふ少く湯とらあるふつけぎの火をさし

小水中の火蠟燭ののりやが如く一若葉がわく此火のやうな
処やうあり夜ふらむとて火をりやその名歎ききやう
ゆり余が江戸の目より視る所とてく奇妙あり唐土の此火
を火井とて博物志或ハ瑯琊代醉小見えなる雲臺山の火井も
此地獄谷の火のごとくある事洪大なる此谷の火小勝ら
唐土と日本とをわく火井の最第一といふ一是を見する事
越遊の一奇觀あり唐土の火井の在る所北の蜀地小屬を日の本の
火井も北の越後小在り自然の地勢小よるやん・さて一人の
哥妓樓上小らむとて小岩居を呼ぶとて樓小のむきり
余ハ京水とて小此湯小浴を樓上小早く三弦をひくせり浴
をりく樓小のむきり小杯盤狼藉たり婢娟哥妓袖をつく杯
素手弄糸朱唇謠曲迦陵頻伽の声外面如芥の色臭を添き
雪譜二編卷之下
五
文溪堂藏

雪譜二編卷之下

文溪堂藏

地獄谷遽然極樂世界とあり此妓どもを養ふ主人も小
來り居て従う料理人小具一なる魚菜を調味させり小
宴を開く是主人俗中小雅を扱ぐ恒小文人を推慕也小是
日も小來りて余小面識するを岩居小物せりとて此人觀る
ゆゑ自ら双坡樓と家号とてその滑稽此一をりて知るべし飄逸
洒落小くく入小愛せし家の前後小坡ありとて双坡の字
下り得ん妙あり双坡樓扇をひげり余小句をむ小妓も持し
扇を出て京水画をる一余即真を書きとてを見り岩居を
むらめめく壁小句を題し更小風雅の真をもりなりかくて
や日も傾きけり歸路を促しけり小哥妓どの草鞋あけ來
りしとてそよひらぐののりやが如く小わくを畢りて
とてきくつとて醉真のむきり小騒鬧し途を行く細流ある所小

けりまば紅唇粉面の哥妓紅襦を褰て涉る花姿柳腰の美人
 等しじをえいて水をくくるあど余が江戸の目よ最珍らしく奥
 わり醉客ぢんくをうへバ醉妓歩く躍る古繩を蛇と一駭せむ
 どきまこくる妓悖し片足泥田へあまのしを衆人駭然と此
 途ハ凡て農業の通路あまば憇之茶店もあく半途小至りて
 古き社小入りてやま一妓社の后小入りて立ち入り石の水盤の
 沽る水を僅小掬手を洗ひし私小去りてあまんそのま樹下小
 立せ玉ふ石地藏芥の前小並びなちあぐ懐中より鏡を出て鉛粉
 のさころをげうをつくり唇紅をさうて粧をうまことこの粧具を
 り小石佛の頭小置く外面女芥内心如夜又のりまめもあま六芥ハ
 あふとやちひ玉あんとものあ一日も已小下晡あればあのかを
 まめく小千谷へうりま

此紀行別小一本あり吾々
 北越旅談小をまむ

正月鳥追櫓之図

図中 山をあす所

皆雪たのみ



圖

新年都未芳

華二月初鷺見

身寄白雪却嫌

春色晚在穿庭

樹化飛雪

涼仙史 圖



○越後の人物

板額女いんがくぢよハ加治明神山かぢあけみやまの城主長太郎祐森ながたろうすけもりが室古志郡むろこしぐんの産うまあり又三
 歳の小児こゝろも知らる酒顛童子しゅてんどうしハ蒲原郡ふはらげん沙子塚村さしづかむらの産うま今猶屋敷跡いまなほやしきあと
 あり始はじめハ雲上山くもがやま国上寺くにがみでらの行法印ぎやうぽういんの弟子でしあり玄翁げんそう和尚おんがうハ伊夜彦山いよひこやま
 の麓ふもと箭矧村やんぎきむらの産うまあり近世ちかきよ小いこくく徳僧高儒とくそうこうにゆ和哥書画わがしやゑゑの人ひとあり死しふ
 一ひともあつざさごとく遠く四方ちうほう小雷名ちうらいめいせえままくはは画人ゑがし吳俊明ごしゆんめいのち紅戸べにと小こ近年ちかきよ相あひま
 撲つ小越海鷲こゑのうみじゆテ濱はまハ新泻あひがほの産うま九紋龍くもんりゆうハ高田今町たかたけいままちの産うま関戸せきとのハ次弟濱ついでなまの産うま也
 常人とこびとあつあつ力士りきしの聞えありきこハ頸城郡くびきの中野善右なかのぜんすけ門立石村かどたしむらの長兵衛ながべゑ蒲
 原郡はらげん三条さんじょうの三五さんご右門みぎかど是等これら無双ぶさうの大力たからちからあつあつく人の知しる所ところあり又鑑あやかし沼ぬまハ近ちかき
 横戸村よことむらの長徳寺ながとくでら谷根村やぶねむらの行光寺ぎやうこうでらも怪力きやうりきのきとえたりと此人このひとハハららごと
 も獨ひとりく鐘かねを軽かろく掛かきつつるるやどの力ちからハ有あり人ひと々々あり又孝子かうしありハ
 じうじうハ村上小次郎むらかみせうじらう新癸田しんゑいでんの菊女きくめ頸城郡くびきの僧知良そうちりやう近ちかくハ三鳴郡さんめいげん村田

村の百合女百姓伊兵衛が新発田荒川村門左門百姓丑之介塚原の豆腐賣春

松鎌女が蒲原郡釈迦塚村百姓新六孝子の名一国小高かりき今

存在あるもありとや

百樹曰余越後ふいふ板額あるハ酒顛童子の旧跡をもたぐ新

写をも一覽ある名の聞えたる神佛をもをがたてまつり寺泊小のころ

順徳帝の鳳跡義經夢凶国師法然上人日蓮上人為兼卿遊女初

君等の古跡もたぐもやとおひい小越後ふ入りそのもち氣運順を失

ひ年稍儉しく穀の價日小躍人氣穩あつて心歸家小ありと

風雅をうしるあひ古跡をも空しく過り惟平くする旅人ともありと

およびする文雅の人をも刺問ざりし今小遺憾あり嗟乎年の儉

せしをいんせん

○無縫塔

阪野陣之圖

長の太郎
 謙小遣ひ
 鎌倉より
 討手未しお
 阪野女大将
 とて速く
 の軍小勝て
 野陣を張る
 事ハ亦文小
 あり文小不
 けい小合者つ
 ら小一圖を
 のり
 兎曹の



観小供を
 けい軍器
 の時代ハ
 棄て
 訂む



蒲原郡村松より東一里來迎村小寺あり永谷寺といふ曹洞宗あり此
 寺の近く小川あり早出川といふ寺より八町をり下小観音堂ありその下
 を流る所を東光が淵といふ永谷寺へ入院の住職あるが此淵へ血脈を投げ
 入る事先例ありさて此永谷寺の住職遷化の前年此淵より墓の石小
 ろるべき圓き自然石を一つの岸小出た是を無縫塔と名づけつゝ此石出たバ
 その翌年必む住職病死する事むしより今ふりより一度も違ひ
 する事あり此墓石大小小よりん住職の心小應せむ淵へ之せむその夜淵
 逆浪し住職のこのむ石を淵小出たる事度あり先年凡僧ら小
 住職し此石を見ん死を懼き出奔せし小翌年他国小ありて病死せしとぞ
 おのふ小此淵小灵ありて天然の死を示るるが友人北洋主人見附の景
 文をこの件の寺を覽る話小本堂間口十間右小庫裏左小八間小五間の
 書をくす禅堂あり本堂小の左り小鐘樓あり禅堂のうら小蓮池あり

上小坂あり登りて住職の墓所ありかの洲より出りたる圓石を人
作の石の臺の脚ありふのせり墓とを中央あるを関山とて左右小次
第しくサ三基あり大なる徑一尺二三寸むより八九寸六七寸ありも
あり大小和尚の徳小應とといひつゝふとを臺の高さ六尺のほど一尺
むよりありと語りてよきかの洲小灵ありといふはむり永光寺のや
とり小貴人何某住玉ひ小その内室色情の妬み夫をうとを東
光が洲小身を沈め冤魂悪竜とありて人をあやましを永光寺の関
山名をきりけしや血脉をうの洲小たつて化度一玉ひひぬ悪竜得脱あり
その礼とてかの墓石を洲小いづて死期を示し是以今ふりて
も入院の時ハ洲小血脉を沈むと寺説小つてふとを○さてま我が隣國信
濃前編灵異之部信濃國無縫塔の事あり近江の石亭が雲根志ふりて
高井郡あかひ湯村横井温泉寺の前小星河とて幅三町むりの大河

雪譜二編卷之下

文溪堂藏

あり温泉寺の住僧遷化の前年小此河中へ何方よりとも高く高さ
二尺むりある自然石の方小くうのうのうの石塔一ツ流きまう実り
彫刻せるごとくあり天然の物あり此石出ると土民ども温泉寺へ去
せる事ありきらめり翌年住僧遷化あり別あり小此石を立九代
以前より始りて九代の石塔同石同様めり少くも違はず並び
あり或年の住僧此塔の出る時天を拜しといひの我法華千部讀
經の願あり今年小く満り何とを命を今年延一玉へと念
ふてこの塔を川中の洲小投こたり何事もなく一年すぎり千部
讀經のすこし月小件の石又川中ふあり其翌年をじり遷化
ありとこの次の住僧塔のゆる時何の程かひもなく洲へあげとて
幾度あげて其夜そのよふいでり翌年病死ありとて
此辺あり是を無帽塔と名づく以上一條の全文越後小永光寺信濃小温泉

寺事の相似する一奇怪といふ。○百樹曰牧之老人が此草稿を視て無縫塔の縫の字義通トグク誤字あやとて劃示トク問ひけしむ。無縫塔と書傳トグク。いひく。ぬ雲根志の無帽塔とあり。無帽の字も又通トグク。おそくハ無望塔あやあらん住僧の心少ハ死がしやさふ無望塔あぶ。くハ無誓の一笑を記トク博識の確拠を録ト

○北高和尚

魚沼郡雲洞村雲洞庵ハ越後国四大寺の一あり四大寺とハ滝谷の慈光寺村松小村上の耕雲寺伊弉彦の指月寺雲洞村の雲洞庵あり十三世通天和尚ハ霜臺君の謙信親藉ゆく高德の聞えハ今も口碑小のこもり 景勝君も此寺小物学び玉ひトク一国の大寺あし古文書宝物等も多しその中小火車落の袈裟と

雪譜二編卷之下

文漢堂藏

いあり香深の麻と見ゆる小血の痕のこもり是を火車落とく宝物とまる由來ハむ。天正の頃雲洞庵十世北高和尚といひハ学徳全備の尊者ゆくおろせり其頃此寺小ちうた三郎九村の農家小死亡のりのあり小時も冬の雪ありつぎ雪吹もあざりけむ三四日ハ晴をもちて葬式をのぐ。く小晴ざりなむが強くいとるを。且那寺あしむ北高和尚をむく棺をいづ。親族ハさく人々蓑笠小雪成あぎ送るゆその雪途もや半小いりし時猛風俄小ちり黒雲空を布滿て厩夜のぞいづくともあく火の玉飛来り棺の上小覆かり。火の中小尾ハあまたある稀有の大猫牙をあり鼻をさき棺を目かけくとんと人々こをを見く棺を捨あけのまろびつ逃まどふ北高和尚ハもくも恨むいりあく口小呪文を唱大声一喝。鉄如意を擧ぐ飛つく大猫の頭をうち玉ひ。小から

や破きらん血やぞう〜衣をけり〜妖怪ハ立地ハ逃去りけ
とゞ風もや〜雪もを〜事ろく〜葬式をい〜とけり〜寺の
旧記ハの〜此時め〜るを火車の〜の法衣を今ふつ〜

百樹曰余越遊〜塩澤ハ在〜時牧之老人ハ伴〜雲洞庵ハ

い〜一里を〜庵主ハも對話〜かの火車が〜の袈裟といハ物

その外の宝物古文書の類を〜一覽せりい〜大寺あり祈禱

の二字を大書〜る堅額ハ 順徳院の震筆ありとぞ 佐渡ハ辻 幸のとの

震筆 門前ハ直江山城守の制札あり放火私伐を禁むるの文あり

庭中池のほとりハ智勇の良将宇佐美駿河守又死の古墳在り〜を

先年牧之老人施主〜新ハ墓碑を建〜不朽の善行也

い〜 本文ハ火車といハ所謂夜叉の〜夜叉の怪ハ 唐土の書ハもあ〜散見セリ

○年賀の哥

雪譜二編卷之下

余六十一還暦の時年賀の書画を集む吾国ハさ〜り諸国の文人

三都の名家妓女俳優來舶清人の一絶をも得〜り牧之ハ贈と

いハ更を〜り〜人より入ふ〜千餘幅ハ〜り帖と〜

藏をひ〜せ是を風入〜る〜鋪ハ〜きたる坐〜きの障子を〜

年賀の帖を披き並〜る所〜友人來り年賀の作意書画の評

あ〜る〜るを〜りも順礼の夫婦軒下ハ 我が里言ハハ 廊下といハ 立けり吾ガ家

常ハ草鞋をつ〜せ〜る者ハ施をゆ〜を〜錢を〜

此順礼の翁立〜る〜年賀の帖を心ある〜見〜

云〜る〜る〜も順礼の腰を〜申さんたん〜

といハも食の〜る〜似氣〜る〜る〜と思ひ

あ〜る短尺を〜る〜り〜

三途川〜る〜百事も君ガむ〜る〜五放舎

とまゝにうらふてのそとびも拙くも年賀あはむとや〜からりるも
趣向とのい順礼ふ五放舎と戯まてつる名もなり〜ろく友人と俱ふど
ろに感ト宿を施行せんや〜りのごりせんあど友人もさぬ〜ふ
まゝめよれと杖をとらめび〜ん立さうりけり国ハ西国とぞうりらりら
るるものよてやありけん

○逃入村の不思議

小千谷より一里あまりの山手小逃入村といふありあがりを里俗にぞろとよぶ此村小大
塚小塚とよぶ〜大小ニツの古墳双びあり所の傳つとふ大あるを時平の塚と
小なるを時平の夫人の塚といふ時平大臣夫婦の塚此地小在あるいきゆ縁のま
ことハ論ふむらむら俗説ありまらまどもあるいつの不思議ありそのふし
まをむらむら〜時平小ゆりの人越後小流なるまと〜て此地小終り
るるあやあらんその不思議といふハ昔より此逃入村の人手習てうしゆひをまてまてま

北高禪師勇氣圖



天満宮の崇ありとて一村の人皆無筆あり他郷小身を寄て予習
 せまむ崇ありとてあまごども村ふくまむ日を追て字を忘と終あふ無筆
 とあるこのゆゑふ文字の用ある時ハ他の村の者ふたのそて書用を弁む
 又此村の子どもあま江戶土産とて錦繪をりひる中ふ天満宮の繪
 あまぶらあまご神の崇りの兆ありし事度くありしとてさまぶかの大
 塚小塚を時平大臣夫婦の古墳ありと古くひひつるも何ら由縁あり
 事あるべし管家の筑紫あふ薨ト玉ひるハ延喜三年二月廿五日あり
 今を去る事百樹曰く今といひハ牧之老人が此まごがき一なる文政三年をいふなり九百十五年前あり今ふり
 ても神しんの明あきたる事あるべし尊うやまつむべし又とふるわを事
 あり南みなみ路ぢが東とう遊ゆう記きを見ふ南みなみ路ぢ東とう遊ゆう一々津つ輕かろふ居ゐる時六七日も
 風雨かぜあめつぎうら所ところの役人丹後の人や居ると旅たび店や毎ごとふきびりたる也
 ゆゑ南みなみ路ぢあはれ小こそのゆゑを問ひけまぶあまどりりやう當あつち国くに岩いわ城しろハ人の

ありける安壽姫對王丸の生国ありさきむむの一人此御ありを岩城山
の神小まつりく社今小在り此兄弟丹後小さるよひ三庄太夫が為小困苦
するゆゑ小丹後の人をいささかひ丹後の人此国小入るはるる大風雨有て
日をこする事むうよりの事あり丹後の人此国の塚をいづる風雨なら
まらゆむゆゑ小丹後の人や居ると捜ありといつりと南谿子此事小遇
ふりとい記せり右小兄弟の父岩城判官正氏在京の時諺小あひく
家の亡びするハ永保年中の事あり今をさる事むよ七七百五十余年之
兄弟の怨魂今小消滅せざる事人知を以論むる也百樹曰安壽對王丸妻ありは塩尻
廿二卷小只り略考
西遊記前編景清が塚八日向小あり世の知る処あり其母の塚ハ肥後国杵
の人吉の城下より五六里ほど東切幡村小あり此所小景清が娘の墳も
あり一村の氏神小まつる此村もあつた盲人を忌む盲人他処より入るは
必崇あり景清後小盲人小ありしゆゑ母の灵亡盲人を嫌ふと所の人の

雪譜二編卷之下

文溪堂藏

とりのト記せりことこの変逃入村の不思議小類せり志る事ごとく件の
二ツハ社ありて丹後の人を忌む墓ありて盲人をさらふあり逃入村も
墳ありゆゑ小天満宮の神灵此地を忌む玉ふらんをもの考ふる小
かの古墳いよ〜時平が血脉の人あるべし

百樹曰余越遊〜小千谷小在り〜時所の人逃入村の事を語
りける古墳を見玉〜案内を〜といひ〜と菅神のしと玉ふ
所ハ文墨の者強〜ゆ〜きふもあつた話を書き〜のそめ〜ゆ
ざりきさきと 天神様といへば三歳の小児も尊び時平ときけは此
御神を諺言〜たる悪人ありと〜其悪千古小上下〜く哥舞妓
狂言の作りあり〜婦女子も普〜知る所あると〜童稚女子ハその
實跡を志るが稀ありさきむむか〜るをらあは冊子小此
御神の事を記さるいよ〜か〜とけ〜と逃入村の因ふより〜

書載を

○謹心案^{つらん}小管原の本姓ハ土師^{とじ}あり一ハ土師の古人^{ふるび}といひ一ハ
 先仁帝^{せんじんてい}の御時大和国管原といふ所小住^{せむ}するゆゑ小土師の姓を管
 原小改らる管神御名ハ道實^{みちざね}字ハ三童^{さんどう}名を阿呼^{あこ}とやたてまつる^{御呼の}
 余^あが考^{かう}あれども文^{ぶん}仁明帝^{にめい}小仕^{せむ}玉^{たま}ひなる文章博士^{ぶんしょう}参議^{さんぎ}是善卿^{ぜぜんけい}の第三^{だいさん}の
 長^{なが}けとふそとく仁明帝^{にめい}小仕^{せむ}玉^{たま}ひなる文章博士^{ぶんしょう}参議^{さんぎ}是善卿^{ぜぜんけい}の第三^{だいさん}の
 御子^{みこ}兼和十二年^{けんわじふにねん}小生^{せうなま}と玉^{たま}ひり七歳の時^{しちさいの時}红梅^{こうかい}を御覽^{ごらん}じく梅の花
 紅脂^{べいし}のいろやど似^にたる哉^や阿古^{あこ}が顔^{かほ}やもやど似^にたりけり十一の春^{しゅう}齊衡^{せいこう}父君
 より月下梅^{げつげのうめ}といふ詩の題^{だい}を玉^{たま}ひなる時^{とき}即坐^{すま}小月輝^{せうげつ}如晴雪^{にせうせつ}梅花^{めいが}似^に
 照星^{てうせい}可憐^{これん}金鏡^{きんきやう}轉^{てん}庭上^{ていじやう}玉房^{たまふらう}馨^{かほ}御祖父^{ごそふ}公^{こう}清^{せい}御父^{ごふ}卿^{けい}是善^{ぜぜん}の学業^{がくぎふ}
 を受嗣^{うけつぎ}玉^{たま}ひて文藝^{ぶんぎ}ハさうあり武事^{ぶじ}ゆも疎^そくまきりくたり
 ○清和天皇の貞觀元年^{せいわてんかうのていかんげんねん}御年^{ごねん}十五のて御元服^{ごげんぷく}同四年^{どうしやうねん}文章生^{ぶんかうせい}小
 拳^{あか}ら且下野^{げの}の權掾^{ごんせつ}なるせらる同十四年^{どうじふしやうねん}御年^{ごねん}廿八御母^{ごぼ}伴氏^{ばんぢ}身

雪譜二編卷之下

まろり玉^{たま}ひ陽成^{やうせい}天皇^{てんかう}の元慶四年^{げんけいしやうねん}八月晦日^{はつげつまいにち}御父^{ごふ}是善卿^{ぜぜんけい}も身まろり
 玉^{たま}ひり^{御年}此^{この}時^{とき}管神^{くわんじん}ハ御年^{ごねん}四十一あり○寛平四年^{かんぺいしやうねん}御年^{ごねん}四十八
 類聚^{るいご}国史^{こくし}二百卷^{にひやくまゐり}を撰^{せん}玉^{たま}ひ和哥^{わが}ハ管家^{くわんけ}御集^{ごしふ}一卷^{いっまゐり}詩文^{しぶん}ハ管家^{くわんけ}文章
 十二卷^{じふにまゐり}同後草^{どうごそう}一卷^{いっまゐり}^{後草ハ筑紫}今^{いま}も世^よ傳^{つた}ふ大納言^{おほののり}公任^{こうにん}卿^{けい}ハ朗詠^{らうぎやう}集^{しふ}ハ
 入^{いれ}るる^とる^とる^と管家^{くわんけ}の詩^しハ送春^{そうしゆん}不用^{ふよう}動舟車^{どうしゆしや}唯^{ただ}別殘^{べつざん}鶯^う与^と落花^{らつが}
 若使^{もし}詔^{みことごと}光^{あき}知^し我^{われ}意^い今宵^{こんしやう}旅宿^{りょしゆく}在^あ詩家^{しけ}此^{この}御作^{ごさく}ハ延喜帝^{えんぎてい}のまご
 東宮^{とうぐう}の^時令^ま旨^しあり^て一時^{ひととき}の間^ま小十首^{せうじゆしゆ}の詩^しを作り^{つく}玉^{たま}ひなる其^{その}一^{いつ}
 あり○さへ御^ご若年^{じやくねん}より數階^{すうかい}を歴^かりて後^{のち}寛平九年^{かんぺいくわんねん}御年^{ごねん}五十三
 權大納言^{ごんおほののり}右^{みぎ}□將^{まさ}を兼^{かね}らる此^{この}時^{とき}時平^{ときへい}大納言^{おほののり}小任^{せむ}せと左^{ひだり}□將^{まさ}を兼
 管神^{くわんじん}と並^{なら}び立^たて執政^{しやくせい}なり此^{この}時^{とき}大臣^{だいじん}の官^{くわん}ありしゆゑ大納言^{おほののり}ありて執政
 なり此^{この}年^{ねん}七月三日^{しちげつさんにち}宇多帝^{うたてい}御位^{ごゐ}を太子^{たいし}敦仁^{あつじん}親王^{しんおう}讓^{あづか}り玉^{たま}ひ朱雀^{すざく}
 院^{いん}入^{いれ}らせ玉^{たま}ひ亭子^{ていし}院^{いん}と申^{まを}奉^{たご}り御法^{ごほふ}体^{たい}ありて寛平^{かんぺい}法皇^{ほふかう}とて

中奉^{ちゆうほう} 敦仁親王^{とんじんしんおう}を醍醐天皇^{たいごてん}とす 後^{のち}より延喜帝^{えんぎてい}とす 中奉^{ちゆうほう}
御年^{ごねん}十三年^{じゅうさんねん} 年号^{ねんごう}を昌泰^{しょうたい}と改元^{かいかん}を同二年^{どうにねん} 時平公^{ときへいこう}左^{ひだり}□臣^{しん} 管神^{くわんしん}右^{みぎ}□臣^{しん}
相俱^{あひま}小^こ 帝^{てい}を補佐^{ほさ}し奉^{ほう}らる 時^{とき}小^こ 時平公^{ときへいこう}二十七^{にじゅうしち} 管神^{くわんしん}五十四^{ごじゅうし} 兩公^{りゆうこう}
左右^{さゆう}の□臣^{しん} 才德^{さいとく} 年^{ねん} 齡^{れい} 双壁^{じゆうへき}をうまひ故^{ゆゑ}小^こ心^{こころ}齟齬^{そご}し 相^{あひま}
和^わせを是^{これ} 管神^{くわんしん}の諛^{げん}毒^{どく}を得^え玉^{たま}ふの張本^{ちやうほん}あり○をもく 時平公^{ときへいこう}
大職冠^{たいしやくかん}九代^{くわいだい}の孫^{そん}照宣公^{せうせんこう}の嫡男^{ちやくなん}ふく代^よ□臣^{しん}の家柄^{いえがら}らうりあるのこ
ろ^{ころ}を 延喜帝^{えんぎてい}の皇后^{こうごう}の兄^{あに}ありこのゆゑ小^こ若年^{じやくねん}ふく□臣^{しん}の貴^き
重^{ちゆう}小^こ職^{しやく}しあり此人^{このひと}の乱行^{らんぎやう}の一^{いち}を言^いハ叔父^{しやくふ}たる大納言^{だいなごん}国経^{くにのり}卿^{けい}八年^{はちねん}
老^{おい}叔母^{しやくぼ}する北^{きた}の方^{かた}八年^{はちねん}若^{わか}く業平^{ごうへい}の孫^{そん}女^{むすめ}ゆく絶世^{たつせ}の美人^{びじん}あり時平^{ときへい}
是^{こゝ}小^こ意^いくを夫人^{ふじん}もまへて夫^{をとこ}の老^{おい}を嫌^{きら}ふの心^{こころ}あり時平^{ときへい}或^{ある}日^ひ国経^{くにのり}の
許^{もと}ふ宴^{えん}し醉^{すゐ}奥^{おく}ふまぎし 夫人^{ふじん}を貫^{つら}んとしひを国経^{くにのり}も醉^{すゐ}
こゝに戲言^{ぎげん}とちひひしりさへ国経^{くにのり}が醉^{すゐ}跡^{あと}するを見^みて叔^{しやく}

雪譜二編卷之下

母^{はは}を車^{くるま}小^こいご入^{いり}まし立^たちの尻腹^{しつぷ}小^こ生^なまを中納言^{ちゆうなごん}敦忠^{とんちゆう}といふ
時平^{ときへい}の不道^{ふだう}此^{こゝ}一^{いち}を以^もて其餘^{そのよ}を知^しるべし かく不道^{ふだう}の人^{ひと}ありま
寛平^{かんへい}法皇^{ほうわう}の御心^{ごこころ}あり時平^{ときへい}の任^{とく}を除^{のぞ}き 管神^{くわんしん}御^ご一人^{ひとり}小^こ国政^{こくせい}
をまうせ玉^{たま}ふんとのむがけあり ありし延喜元年^{えんぎげんねん}正月^{しょうげつ}三日^{さんびつ}
帝^{てい}高子院^{たかこいん}朝觀^{あそくわん}のをうり御内^{ごうち}心を示^{あらわ}し玉^{たま}ひふ 帝^{てい}も小^こ
とふまごひ玉^{たま}ひ其日^{そのひ} 管神^{くわんしん}を高子院^{たかこいん}ふめし事^{こと}のようを
内勅^{うちちやく}ありし 管神^{くわんしん}固辞^{こご}しなむし許^{もと}し玉^{たま}ひざりけり
同月^{どうげつ}七日^{にち}後^{のち}二^に 位^い小^こまを此^{こゝ}密事^{みつじ}のふしり時平^{ときへい}公^{こう}の聞^きふ事^{こと}しり事^{こと}ふ先^ま
いし 帝^{てい}小^こ説^{せつ}をさうふ君^{きみ}の御弟^{ごてい}齊世親王^{さいせいしんおう}の道實^{だうじつ}の女^{むすめ}を室^{むろ}
通^{とほ}し電^{でん}遇^ぐ厚^{こう}し是以^{こゝ}君^{きみ}を祭^{まつ}し親王^{しんおう}を立^た立^た国柄^{こくがら}を一人^{ひとり}の手^て
小^こ握^{にぎ}んとす密謀^{みつぼう}あり 法皇^{ほうわう}も是^{こゝ}小^こ應^{おう}し玉^{たま}ふの風説^{ふうせつ}ありと
言^いを巧^{たくま}し説^{せつ}しけり 時^{とき}小^こ延喜帝^{えんぎてい}御年^{ごねん}十七^{じゅうしち}あり 白^{しろ}皇后^{こうごう}ハ

時平公の妹ありて内外より諛毒を流して若帝の御心を動し奉りしるあり○さて時平が毒奏とて中りて同月廿五日左降の宜旨下りて右□臣の職を削り從二位に降りて太宰權師とて文筑紫へ左遷不定め玉り寛平法皇此事を聞けりて大ふをろをぬの御車もめり玉りて俄小御番をせり玉ひて清凉殿小立せ玉ひ斯と申せとありしうごも左右の諸陣警固て事を通せども時平諛小味を菅根の朝臣がとらひとてや法皇の草坐玉ひ終日庭上小御一晩小いさくむあり本院へ還玉り○菅神小御子二十三人ありし御男子四人四方へ流し玉ふ是も時平が毒舌小よもり姫さへ都小とて幼きふあり筑紫へ去るなり年頃愛玉ひる梅小とて別ををりてたまひて東風吹く匂ひををせよ梅の花にありとて春を忘れ此梅のつゝ

雪譜二編卷之下

文溪堂藏

飛する事ハ拳世の知る処あり又櫻を「桜花主を忘ぬものありて吹らん風ふさつてはせよ」○斯く延喜元年辛酉二月朔日京の高辻の御館をりて玉ひて津の国須磨の浦小日に移りて一抵りなすへり中記をいひてよりついでにひまのふらふを菅神の筆記せよをいひて須磨の日記を今も世のこころ一説の偽書といふ○筑紫太宰府あり「離家三四月 落涙百千行 万事皆如夢 時々仰彼蒼」御哥小「夕きまば野ふも山ふも立烟りるげきよりのとりのえまきりけし又雨の日は朝かき人ものことおききぬと夜ひるよりもあきぬとていふなり」○ついでに玉ひて不出門行といふ詩を作り玉ひて寸歩も門外にいへ玉ひて是朝廷を尊恐御身の謫官なるをつゝたりのあり御向ふ「都府樓後看尾色 観音寺只聽鐘声」○菅神延喜元年二月朔日都を出玉ひて筑紫へあり玉ひて八月あり是より前の御詩文を菅家文章といひ十二卷左遷より後

のを管家後草とく一巻 今も世のつゝ後草の九月十三夜の題
ゆて「去年今夜侍清涼」秋思詩篇獨斷腸 恩賜御衣今
在此 捧持毎日拜餘香」此御作不注ありその趣ハ〇去年と
昌泰三年あり延喜元年其年の九月十三夜 清涼殿不時候あり
時秋思といふ題を玉りし不詩の意不ことよせし諫たてまつりし不
其のまゝを容玉ひよるごせのひて御衣を賜ひしを此配所不も
せりし毎日御衣不のりたる餘香を拜と帝をまゝい御恩状
忘と玉りざる御心の誠を作り玉ひするあり此一詩をゆりても無
實の流罪不所し露をりも帝を恨と玉りしを知りて朝
廷を怒るのひく魔道不入り雷公不あり玉ひするといふ妄説ハ次不
弁ぶべし〇高辻の御庭の櫻枯るとまゝ玉ひて「梅ハ飛榎ハか
世の中不松むりこそつとまりけし」〇まゝ太宰府不謫居志の事

雪譜二編卷之下

三年不々々延喜三年正月の頃より 御心例ありて二月廿五日
太宰府不薨り玉り御年五十九御墓不府不ちり四辻といふ所
不定め 御棺をいづる不途中不とままりんごうと別その所不
葬り奉る今の 神齋是あり〇延喜五年八月十九日同所安樂寺
不始く 管神の神殿を建らる味酒の安行といふ人は是をうけ
たまひる同九年神殿成る是よりさき四人の御子配流をゆるさき
玉ひかひの故の位不むさき玉ふ〇神去玉ひ一のち水旱風雷の天
愛をくありし人の心安らざる是ぞ 管公の崇りあるらんぞ
風説をけりしとや〇管神薨去より七年不あがり延喜九年
四月左〇臣藤原時平公薨る歳三十九又一男八条の大將保忠その
弟中納言敦忠おび時平の女延喜帝の孫の東宮まもり相つきて
薨せらる又時平の諺毒不荷贍ある管根の朝臣ハ延喜八年十月

死をこぼしらの事どもをも 菅神の崇ありとせし流布せし
菅公の冤譴を世の人哀戚きたるゆゑとや 〇延長元年三月保
明太子薨去 時平の孫まへ 〇同年四月廿日贈位正二位本官の右〇臣
小復一玉ふ 神きりひ 〇一条院の御時正曆四年五月廿一日
菅神小正位左〇臣を贈らる 菅神百年 御忌ある 〇同年閏十月十九日
大政〇臣を贈らるるまじ此 御神の御位正一位大政〇臣とあふ
後年屢 神霊の赫たる徴ありふとて 天満宮或
自在天神の贈称あり〇そもく 醍醐天皇ハ 在位 百年 百廿代の御皇
統の中ふも殊小御徳建たりゆゑ延喜の聖代と称し御在位の
久よりゆゑ 延喜帝とも中奉る 御若冠の時とやあふ賢者
の聞えある重臣の 菅公を時平大臣が一時の諛口を信し玉ひて
其實否をも礼し玉ひて卒示小菅公を左廷ありし御一代の

雪譜二編卷之下

文溪堂藏

失徳とやいづきあるを 菅神の恨と玉ひざりハ配所の詩哥小
てもあつる 菅神はうらと玉ひざり賢徳忠臣の冤譴を天のい
きどわりて水旱風雷の異変譴者奸人の死亡ありしるん俗子ハ是
を 菅神の怨灵とせらハ是又 菅神の賢行小瑾つけるありとされ
ども竊小謂く賢者ハ旧悪をかりとていふ事小こそよと冤譴
慄愁のあまり 諛言の首唱する時平大臣を肚中小深く恨と玉ひ
しもあふべしむ本編小い逃入村を神の忌玉ふ其徴とせらるの
一ッあふ〇神去り玉ひしより廿八年の後延長八年六月廿六日
大雷清涼殿小墮て藤原清貫 大納言 平稀世 右中弁 其外時候の人々
雷火小即死を 延喜帝常寧殿小渡御ありて雷火を避たすふ
是をも 菅神の崇とせらるいふく 非説ありと安齋先生 伊勢 平藏 の
菅像辨もより〇太宰府より一里西小天拜山あり 菅神六の

山ふのかりて朝廷を怒む告文を天小捧き祈り雷神とあり
玉ひりといふ賢徳の御心を志さざる俗子の妄説を今小傳へたる
あり和漢三文番會小も實一や小記一や八不出門行の御作小
心を深めざるあやわらん○法性坊尊意叡山小在一時管神の
幽冥來り我冤謫の夙懃を償とを願くハ師の道力をりて拒こと
あられ尊意曰來土ハ皆王民あり我ハ皇の詔をうけ玉ハを
避ふ所あり管神作色あり適柘榴を薦管神哺を吐く
焰をう玉ひりといふ故事ハ元亨釈書の妄説小起此書ハ今天保
十年より五百
廿年前元亨二年東福寺の虎関和尚の作ありかろ奇怪の事を記さハ佛者の筆癖ありと妄
齋先生もとり○白太夫といふハ伊勢渡會の神職管神文墨小於
格外的懇友ありゆゑ小北野小祀り今も社あり此御神の事を作
りたる俗曲ハ梅王
松王櫻丸の名ハかの梅ハ飛の御哥ふ○北野の御社の始ハ天慶五年六月九日より
よりにまろけりる名あり

雪譜二編卷之下

文溪堂藏

勅命ふよりて建創其起りハ西の京七條小住する文子といふ女小神
訛ありふよりてあり北野縁起小
つまひりあり○世小渡唐の天神といひて唐服小
梅花一枝を持玉るを画く故事ハ佛鑑禪師聖二国師とあり名を東福
寺の開山国師号の始祖
博多小住玉ひりる跡の地中より掘いごりる石小管神の冥唐
土ハ渡り玉ひて經山寺の無準禪師の師あり法を受玉ひて日本ハ
歸り玉ひりると件の石小彫つけありと古書小見えりるを拠とりて
渡唐の神影を画き傳へるあり此事固妄説ありと安齋先生の
管像辨ふり管家聖唐傳曆といふ書の附録ハ沙門師嵩が
管神渡唐記あり其説孟浪小屬を○管神
左遷の實跡を載するハ日本紀畧抄録小卷序
を失意せり扶桑畧記卷三
○日本史
百の列傳五十○管家御傳記神統管原陳經朝臣御作
正史小よりこれバ証とせ其餘虛實混合し
たる古今の書籍救拳を○本朝文粹小拳より大江匡衡の
文小天満自在天神或ハ塩梅於天下輔導一人帝の或日月於天

上昭臨萬民就中文道之大祖風月之本主也云云大江家ハ

菅原家と俱とも不な朝廷ていてい不な累世るいせいをを儒臣にうしんありありるる不な菅神すげのかみをを崇あがめ

稱たぐするる事件じけんのの文ぶんのの如ごとくく是以こゝ凡たゞ文道ぶんどう不な関者あつら此こゝ御神おんのかみをを崇あがめ

んんや信まことぜぜざざんんやや○かよよをを菅神すげのかみをを祀まつるる社やしろありありるる不な雷除らいよけのの護まも

府りとといいふふ物ものありあり此こゝ御神おんのかみ雷らいのの浮名うきなををううけけ玉たまひひささるるゆゆゑゑ神しん灵れい雷らい

をを忌心いみこころ主しゅふふゆゆゑゑ不な此こゝままゆゆりりるるゆゆゑゑをを験あやありありるる○ささんん如ごとくく件けん條じょう説せつををるるハ

本編ほんぺん小こいいるる逃入にげこり村むらのの神しん灵れいのの事こと不な因ゆゑにに實跡じつせきのの書かきととをを摘要とくごし

て御神おんのかみのの畧傳りやくでんをを見曹こども不な示しををありあり固こ不な学がくののままままととありありるる要跡ようせきのの

漏れるるも説せつのの誤謬ごびうたるるもああるる○ああるる○と謹つとんで附記ふきをを○再按あひあるる不な

孔子こうしのの聖せいるるもそのその灵れいハ生いずる時ときよりよりも昭然せうぜんととししるるそのその墓はか十じゅう里り

荆棘けいげきをを生なせせざざ鳥とりも巢すををむむととづづをを関羽かんうのの賢けんありありるるも死ししてして不な神かみと

ありありるる祈いの不な應おうをを是これ別べつ生せいハ形かたちをを以もつてて運うりり死してて不な神かみをを以もつてて運うるるゆゆゑゑ

七ツ釜之図



ありとや

丈海披沙の説

菅神も此論論近近一

小ころ逃入村の事を以ても千年

ふちうふちうの神しん灵れいの赫くくくくるること仰あふくくアア敬うやふふアア

はて蓋冥まいくくふふの年月を

置おききととききけけばば百ひゃく年ねんもも猶なほ一いち日にちの如ごとくくあるるアア

菅公の神しん灵れいなるおき事こと和漢わかん小多せうた一いちまのまのををささるるををささるるををささるる

○田代たしろの七ッ釜ななつかま

魚沼郡ういぬまぐんの官驛くわんえき十日町じふにちまちの南七里計ななちりけい妻在庄つまざいじやうの山中やまなか

此へんまぶ此へんまぶこしろふ田代ふたしろといふ

村あり村を去さ事こと七八町しちぱちふ七ッ釜ななつかまといふ所あり

里俗りぞく滝たきつつをを釜かまといふ

滝七段たきしちだんありあり由よしるるをを

七ッ釜ななつかまとよよひひききててままりり銚子しやうしの口くち不ふ動どう滝たきああどどいいふふもも七ッ釜ななつかまの内うちありあり妙景めうけい

奇状きじやう筆ふでををののりりとと云いふふとと第七番目だいななばんめの釜かまの地景ちけいをを爰こゝ小圖せうずををささるるををささるる

其大槩そのたいがいををあるるアア此所こゝの絶壁ぜつへきをを堅御号けんごごう横御号よこごごうといふ里俗りぞく伊勢いせよ

り御師ごしの持もててててるるおおももひひ箱はこををかかぐぐううささままといふ此絶壁ぜつへきの石いしの竹箱たけはこの

状じやう似にててるるををののりりとと斯ごとくくありありその似にててるるといふ此こゝのへへききの石いしととその

落おちちるるをを視みままふふ厚あつささ六む七しち寸すん計けいふふ一いちへへ平ひらままありあり長ながささ六む二に四し尺しゃくととりり

長短ハひとしく石工の作り色も如く此石数百万を堅く積重む
此數十丈の絶壁をあると頂ハ山ふつとて老樹鬱然たり是右の方の
堅脚がうりあり左り此石の寸尺ふたがふる石を横ふ積むとて數十
丈をある事右小同トそのさぬ人ありて行儀よくつとあげらるごとく
寸分の斜る天然の奇工奇く妙く不可思議あり此石の落たるを
此田代村の者さるぐの物小用ふ片石も他所小用ふまば崇あは
事度くありとて余文政三年辰七月二日此七ツ釜の奇景を尋て目
撃したるを記す天の范くする他国も是小似する所あべし姑くその
類を示す○百樹曰余仕ふ在り時同藩の文学関先生の話ふ
君侯封内の丹波山山天然磨の状ある石をつとあげ柱のやうある
を並て絶壁をある満山此石ありとて又西国の山ふ人の作りたる
やうある磨の状の石を産する所ありと春暉が隨筆あり見たる事

雪譜二編卷之下

ありき今その所をなすひびごさど

○又尾張の名古屋の人吉田重房が著する鏡紫記行卷の
九小但馬國多氣郡納屋村より川舩より但馬の温泉小抵る途
中を記しする條小曰猶舟小のりて行右の方小愛宕山宮島村
野上村石山地名あり追續くあり此石山の川岸小臨する所小奇く
石あり其形ち磨盤の如く上下平ふりて周ハ三角四角五角八角
等小く石工の切立り如く色ハ青黒し是を掘出りする跡もありて
洞のごとく天下の廣きあり珍奇ある事ありとありけり
是も奇石の類ありと筆の次ふあり

北越雪譜二編卷之三終